

- 2面 対談 自動運航船の未来
(国土交通省と海員組合の合同視察)
- 3面 石巻市・長浜海岸で
子どもたちが地引網体験

船員しんぶん

◆ホームページアドレス <https://www.jsu.or.jp> ◆Eメールアドレス kaiin@jsu.or.jp
全日本海員組合発行 第3125号 (昭和25年8月24日第三種郵便物認可)

2026年(令和8年)
8月5日
本紙は毎月5・15・25日発行

〒106-0032 東京都港区
六本木7丁目15番26号
全日本海員組合本部
発行人 齋藤 洋
TEL 03-5410-8329
FAX 03-6910-5339
定価 1部50円
(組合員の購読料は組合費に含む)

無人運航船プロジェクト・MEGURI2040

国土交通省と海員組合が合同で乗船視察

自動運航実証実験船「げんぶ」に乗船

東京港く仙台港

2020年2月から日本財団が推進している無人運航船プロジェクト「MEGURI2040」は、第2ステージに移行し、7月10日に4隻の実証実験船の一つ、内航コンテナ船「げんぶ」に国土交通省海事局と海員組合が合同で乗船視察し、東京港から仙台港までの実証実験を視察・検証した。乗船視察団は国土交通省海事局から4人、本組合からは田中伸一組合長代行と漢那太作総合政策部長、佐藤哲也国内部執行部員の3人の合計7人。乗船視察中は人間が操船に介入することなく本船が自動で航行する「自律航行」によって、船舶輻輳海域である東京湾内の航行を視察したほか、本船側でトラブルが発生した時に、そのトラブルを陸上支援センターが認識し対処できるのか、テストが行われた。

自動運航実証実験船「げんぶ」



乗船視察団・左から渡邊雄太海事局海技課専門官、漢那太作総合政策部長、藤江晋平海事局海技課海技企画官、後藤章文海事局船員政策課長、鈴木伸也海技課課長補佐、田中伸一組合長代行

自動運航実証実験船「げんぶ」は、2026年1月に竣工した新造船で、全長134メートル、総トン数5689トン、696TEU積み(700TEU型)の最新鋭内航コンテナ船。

長経験者でこのプロジェクトのディレクターを務める桑原悟さんが、視察団に本船の自動運航に関する設備と船内居住区を説明した。桑原さんは株式会社日本海洋科学の執行役員・先進技術グループ長の肩書を持つ。

「げんぶ」が設置されている1とトイレが設置されているほか「げんぶカフェ」と名付けられたカフェテリア兼娯楽室、インドアゴルフ練習ができる部屋など、船内環境の充実も図っている。

長から、船内設備の説明があり「全乗組員の居室で、航行中の船位や荷役の進捗がわかるようモニターを設置し、各種情報をデジタルサイネージとして表示することで、居室から出ることなく次の当直に備え休息することができる。自身が船員として乗船中に経

験したことで、乗組員たちの声も取り入れ、一緒に造り上げた船で、自動運航船の実証実験が、将来、船員を支える大きな一歩になると期待し協力している」と思いを語った。

自動運航実証実験のようす

出港に合わせ、兵庫県西宮市の古野電気株式会社本社にある陸上支援センターの陸上監視者と連絡を取りながら、本船の機関長がバルブ操作やポンプの始動などを行い、ト

その後、遊漁船や横切り船追い越し船などで輻輳する東京湾から浦賀水道を経由して太平洋に出て、一路、仙台港へ向かった。

航行中のトラブルテストは、陸上支援センターには事前に連絡を行わず、本船の圧縮空

通常、5000トンクラスの船舶の出入港時、船橋(ブリッジ)では船長の他、2名程度が配置に就く。しかし「げんぶ」は、離岸時に船長が船橋のウイングで安全確認を目視で行い、テレグラフや舵スラスターの操作をすることはなく、岸壁から距離が保てた後は船橋中央のモニター前に着席し、自律航行の状況を監視しながら出港した。

今回の乗船視察では、自動運航船による自律航行の確立にはもう少し時間がかかると感じた一方、技術開発が進めば、安全性の向上や船員業務負担の軽減につながり、船員という職業が今以上に魅力的になるのではないかと大いなる期待を感じる視察となった。

航海中のようす



船橋での説明



東京湾を航行



エンジンコントロールルーム



げんぶカフェ



デジタルサイネージ



実証実験船「げんぶ」



実証実験船「おりんぴあどりーむせと」



無人運航船プロジェクト・MEGURI2040

対談

自動運航船の未来



左から田中伸一組合長代行、後藤章文 国土交通省海事局船員政策課長

無人運航船プロジェクト・MEGURI2040

この無人運航システムは大きく分けて①自律航行を担う「船舶」②陸上から船舶を支援する「陸上支援」③通信回線と情報管理制御等を担う「通信（衛星通信）」の3つの要素で構成されている。

陸上支援センターは、航行中の船舶の遠隔監視や非常時の遠隔操作を担う施設。統合表示ブロックでは、船舶上の情報や陸上に存在するさまざまな情報を収集し、常駐する

国土交通省・海員組合の合同視察、これまでもを振り返る

日本財団が推進している無人運航船プロジェクト「MEGURI2040」の複数船舶を遠隔で航行支援する「陸上支援センター」が、一昨年の7月に、古野電気本社内に構築され、船舶事故の防止、海運業の担い手不足、離島航路の維持など、さまざまな社会課題の解決につながるものとして研究が進んでいる。また、船舶による実証実験も行われ、陸上支援センターでの機関部実証実験をはじめ、新潟山港と小豆島の土庄港を結ぶ「おりんぴあどりーむせと」での実証実験、内航コンテナ船「げんぶ」の実証実験などを国土交通省海事局と海員組合は合同で視察してきた。今回は実証実験船「げんぶ」に一緒に乗船視察した国土交通省海事局の後藤章文船員政策課長と田中伸一組合長代行が対談し、これまでの視察と検証を振り返った。

陸上船長と陸上機関長がモニターの情報確認しながら、運航状況を把握し、航海計画の策定も可能としている。

後藤章文国土交通省海事局船員政策課長・要約

内航コンテナ船「げんぶ」に乗船しての視察は、実際に船員の仕事を視察することができた上に、陸上支援センターの役割や自律航行システムの能力、通信回線を通しての連携など、深い部分まで理解する機会となり、貴重な検証をすることができました。船員や船舶の安全を守る観点から、船員の航海当直をサポートするための自律航行支援システムなどは、大きな役割を担っていくと思います。その意味で自動運航船の技術開発の歩みは進めていくべきだと思います。

田中伸一組合長代行・要約

国土交通省のご協力により

対談風景



陸上支援センターでの機関部実証実験を視察中



仙台港に入港する「げんぶ」を視察



「げんぶ」エンジンコントロールルームを視察



「おりんぴあどりーむせと」視察のようす



宮城県石巻市

長浜海岸

子どもたちが地引網を体験



参加者全員で記念撮影



7月20日、宮城県石巻市の長浜海岸で、子どもたちに地引網漁で海と接する機会をつくり、海に親しむことに関心をもち、将来、船員職業を目指してもらうことを目的とし、JFみやぎ石巻湾支所、石巻市漁業協同組合、株式会社山根漁業部などの協力のもと、本組合主催の「地引網体験イベント」を開催し、近隣の小学生と保護者など285人が参加した。長浜海岸は石巻湾に面した遠浅の美しい砂浜で、魚市場や市街地に近く、人気を博している。地引網は江戸時代に全盛を誇った漁法で、潮流のあまり速くない砂浜地帯で行われていた。

当日は9時に受付を開始。本イベントを楽しみにしていた親子や家族が集まると、10時に開会式がスタートした。開会式では、高橋健二中央執行委員が「島国日本には船が無ければ経済は成り立ちません。食料の確保のためにも地引網体験を通して、魚の生態や資源保護を知っていただきたい。気候が変わり魚の種類も変わっているため、十分に気を付けてほしい。また熱中症に気を付けながら、みんなで協力して網を引っ張っていただきたい」とあいさつした後、執行部から地引網体験を行うにあたってのやり方や注意事項を説明し、いよいよ地引網体験が始まった。当日の地引網は、両端にロープのついた網をあらかじめ小型船に積み込み、ロープの一方を陸側に渡し、沖合に半円を描くように網を入れた後、もう一方のロープを陸側に渡して、網を均等に保ちながら子どもも大人も参加者全員で力を合わせ精一杯引っ張った。網が波打ち際まで引き寄せられると、ダツ・スズキ・マゴチ・キス・コシロ・カニ・ヒラギ・フグなど、さまざまな海の生き物が掛かっており、子どもたちから歓声があがった。その後は、網に掛かった魚を特設の生け簀（プール）に移すと、子どもたちは泳ぐ魚に興味を示し、目を輝かせながら観察し、魚を手にとって触感や重量感を確かめて、魚との触れ合いを楽しんだ。2回の地引網体験を終え、閉会式を行い、参加した子どもたちからは「楽しかった」「またやりたい」などの感想が聞かれた。また、希望する参加者に魚を持ち帰る袋が渡され、長浜海岸での地引網体験は無事終了した。

伊勢丸



名古屋港の港湾施設を学ぶ



第19回

夏休み伊勢湾発見ツアー

湾内遊覧で夏休みの思い出を作る

海上保安庁のヘリコプターの歓迎



暑い日射しの晴天に恵まれた7月22日、「第19回夏休み伊勢湾発見ツアー」が名古屋港で開催され、一般公募で当選した小・中学生とその家族77組（235人）が、伊勢湾フェリー株式会社の「伊勢丸」に乗船し、中部国際空港付近を周遊する約3時間の伊勢湾遊覧を楽しんだ。乗船セレモニーは太平洋フエリー株式会社の佐藤雄亮職場委員が司会を務め、中部運輸局海事振興部から「日本は周囲を海で囲まれており、伊勢湾発見ツアーでの体験を通じて、良い思い出を作り、海や船に親しむをもつてほしい」とのメッセージが伝えられた。船内には、手旗信号の紹介、救命胴衣の着用指導、クイズラリーなどさまざまな体験コ

ーナーがあり、子どもたちが楽しめるイベントになっている。中でもブリッジ見学は人気があり、普段入ることのできない船橋（ブリッジ）で、乗組員から船舶の設備について直接学ぶことのできる体験に子どもたちは目を輝かせ、熱心に話を聞いた。航行中の「伊勢丸」が中部国際空港に近づく針路を変えると、第4管区海上保安本部のヘリコプターが本船上空を周遊し、大人も子どもも大興奮の中で写真撮影を行った。湾内遊覧を終えて名古屋港に帰港すると、子どもたちは船上からスムーズな係船作業を見学し、参加者は日ごろ体験できない洋上での体験と思いを胸に帰路に就いた。

（名古屋支所）

第10回 東北地区船員就職支援 懇談会



6月12日、宮城県仙台市のハーネル仙台の会場で、第10回東北地区船員就職支援懇談会が開催され、船員養成教育機関から6人、国土交通省東北運輸局から1人、水産庁から1人、水産会社などの関係者28人、本組合から9人の計45人が出席した。

はじめに高橋雅幸東北地方支部長が「本懇談会は第10回目を迎え、関係各位の取り組みが一定の成果に結びつく事例は見られるものの、少子化による労働人口減少の影響で、水産業界全体では後継者確保・育成は喫緊の課題。本日の懇談会が後継者の確保・育成・定着の一助となるよう、忌憚らない意見をお願いしたい」とあいさつした。

船員養成教育機関の意見

▽近年は、商船より漁船志望の生徒が増えている。また、船員の収入や、海技免状が取得しやすい環境であるかを、気にする生徒も増えている。

▽就職した後に、事前のイメージとギャップが大きいと早期に離職してしまうので、就職ガイダンスや求人票では、好ましいことだけでなく、厳しいことも含めた情報を生徒たちに伝えられるよう記載をお願いする。

▽商船会社からの学校訪問が増えてきている。情報提供の手段では、動画投稿サイトを

活用する事例も増えている

の求人・求職状況が報告され、一般社団法人全国漁業就業者確保育成センターからは、学生向けの漁業ガイダンスの実施状況と生徒たちの感想や意見が報告された。

会社側の主な意見

▽当社は、若年船員のために陸上休暇を増やしていたが、現在はむしろベテラン船員が長期の休暇を喜んでおり、若年船員のほうがお金を稼ぐために早く出漁したいと言っている状況もある。

▽SNSの活用や就職ガイダンスに若い船員を参加させることで、学生が情報に触れる機会を増やし「漁船に乗船している自分のワークライフバランス」を事前にイメージできるようにすることが重要だと思ふ。

懇談会は、若者の船員職業選択に向けた課題や後継者確保・育成と定着への取り組みについて意見交換が行われ、共通理解を深めて終了した。

《東北地方支部〓発信》

海上航行安全祈願祭 (北九州市・明石与次兵衛塔)

7月3日、梅雨の蒸し暑さが残る中、関門橋の袂にある明石与次兵衛塔に行政機関をはじめ関係諸団体と関係各社から総勢48人が参列し、海上航行安全祈願祭が執り行われた。

海上航行安全祈願祭の開催にあたり、主催者を代表し浅野忠行九州関門地方支部長が「この慰霊塔は1592年に豊臣秀吉が乗船する船が関門海峡入口で座礁し、その責任をとり自刃した船奉行「明石与次兵衛」を慰霊する塔です。豊前の領主となった「細川忠興」が与次兵衛の死を悼み、関門海峡を往来する船舶の安全を願ひ海峡の岩礁に建立され、度々の移転や再建を経て、地元の有志が1955年に海難守護神として公園内に再建したものです。

昨年の海難事故数は1700隻を超え、依然多くの海難事故が発生しています。海難事故の撲滅は船員の生命、船舶の安全を守る重要課題であり、関係団体と連携しながら、海難事故の撲滅および、船舶の航行安全を願ひ、恒久的な海の平和を希求する運動にまい進することを誓います」とあいさつした。

続いて参加者を代表し、北九州市門司区区长岩村恭代氏の代理で大浦太九馬氏、門司海上保安部長稲田健一氏の代理で山口昌之氏から来賓あいさつがあり、和布刈神社宮司の御祈禱と、参列者の玉串奉奠を行い、最後に船舶の安全・港の発展を参列者全員で祈願した。

《九州関門地方支部〓発信》

釧路海の月間行事

海岸清掃で 海の恩恵に感謝



北海道釧路市では本格的な夏を迎えた7月1日、これまでの暑い時期を上回る異例の気温25度の快晴の下、海の月間行事の海岸清掃を行った。釧路海の月間実行委員会が主催する海岸清掃は、海の恩恵に感謝するもので、毎年、海員組合道東支部も参加している。

今回は実行委員会の会員55団体・企業から、約150人が参加して海岸清掃を行った。毎年の海岸清掃の効果で、海岸や海浜のゴミは減少しているが、沖から流れ着くペットボトルや発砲スチロールなどのマイクロプラスチックの元になるゴミの割合が多く、空き缶なども含め、約400キロのゴミを回収した。

《道東支部〓発信》

浅野忠行九州関門地方支部長のあいさつ



海の日・関連イベント

クリーンアップ2026 (那覇市・旭ヶ丘公園)



7月17日、那覇市旭ヶ丘公園の「海鳴りの像」周辺で、沖縄支部職員と現場組合員、船員OBで清掃活動と草刈りを実施した。

当日は、晴天で日差しが強いため、熱中症対策を万全にし、沖縄支部職員4人、組合員3人、船員OB3人の計10人が参加の下、約1時間の清掃活動を行った。清掃後は、戦没疎開船の慰霊碑「海鳴りの像」で集合写真を撮影し終了した。

8月15日の終戦記念日を前に、先の大戦で悲劇に見舞われた方々に哀悼の気持ちを込め、今年も清掃活動が実施できたことは、大変意義のある活動であったと感じている。来年以降も継続していきたい。

《沖縄支部〓発信》